

教育研究業績書

令和5年5月10日

氏名 安村 直己 印

教育上の能力に関する事項

事項	年月	概要
1 教育方法の実践例	2011年4月～ 2015年7月	「健康心理カウンセリング」の講義では、ライフサイクルに沿った心理的課題に伴う臨床例を守秘義務に配慮しながら具体的に紹介し、その事例に関する感想を必ずレポートさせ、それに対し教員が詳細なコメントやその学生に向けてのアドバイスを毎回全員につけて返すことを続けた。そのことによって受講生の講義への動機づけが明らかに向上し、レポートの内容に進歩の見られた学生も多かった。
2 作成した教科書・教材 西村健・高橋依子・白樫三四郎編「メンタルヘルスへのアプローチ」（ナカニシヤ出版）	2010年3月	甲子園大学の教授陣で分担執筆したメンタルヘルスに関する講義のために作られた教科書である。「家庭におけるメンタルヘルス」の章を分担した。
3 教育上の能力に関する大学等の評価	2013年、2014年	毎年行われる学生による授業評価で、1回生の必修専門科目である「健康心理学概論」（安村担当）の2013、2014年度の評価で、「総合的に満足できた」に「そう思う」と「どちらかというそう思う」を合わせれば2年連続で100%の学生が満足できたと答え、好評価を得た。
4 実務の経験を有する者についての特記事項	2011年4月～	2011年より毎年、心理学部公開講座において各種講演を行ってきた。2014年3月には、甲子園大学教職員研究会において、学校教職員のメンタルヘルスに関する教育講演を行った。
5 その他		

職務上の実績に関する事項

事項	年月	概要
1 資格、免許	1989年3月	臨床心理士資格（登録番号00978）
2 学校現場等での実務経験		
3 実務の経験を有する者についての特記事項	2013年4月～	日本精神分析的心理療法フォーラムや日本精神分析的自己心理学協会主催のワークショップや研究会で症例報告を行った。
4 その他		特記事項なし

様式第4号 (教員個人に関する書類)

担当授業科目に関する研究業績等						
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数 (総ページ数)	概要
家族心理学	(著書) 1. 「臨床心理学体系 第4巻 家族と社会」	共	1990年 10月	金子書房	176-194 (18 ページ)	家族への心理療法的アプローチとして家族療法を取り上げ、特に精神力動的アプローチの理論と実際について解説した。ボーエンによる家族システム療法がその代表であり、ボーエンの多世代投影過程や三角関係化の理論を詳しく解説し、臨床例と共にその臨床的有効性を示した。また、家族システム療法の視点はチーム治療に有効であることを臨床例を挙げて提唱した。(執筆部分・第IV-3章の「精神力動的アプローチ」を担当・著者 松田孝治・安村直己)
	2. 「きょうだいメンタルヘルスの観点から分析する」	共	2009/7/ 1	ナカニシヤ出版社	163 ~ 179、 163 ~ 170、 191 ~ 20	これまで家族研究の中で取り上げられることが少なかった「きょうだい関係」に焦点を当て、メンタルヘルス的な観点からその特徴と諸問題を概説し、それらを事例検討を用いながら包括的に論考した。(執筆担当部分；第6章「メンタルヘルス事例にみるきょうだい葛藤」の第3節「パーソナリティ障害」及び第7章「家族療法からみたきょうだい関係」を執筆(編者：藤本修、東牧子、荒賀文子)
	(学術論文) 1. 「思春期症例を通してみた変動する家族についての一考察」(査読付き)	単	1996/12 /1	家族療法研究 第13号 3巻	34~39	価値観の多様化や自己愛傾向など、現代社会が抱える問題が家族に与える影響について、ある思春期の不登校の事例を通して考察した。有名中学への登校を拒否した長男は、今日の自然破壊を憂い、両親は古いや靈感など神秘主義的な世界に没頭していた。現代における家族は、技術の世界と超越の世界とうアンビバレンツを抱える容器とならなければならないことを論じた。
	2. 「兄弟ともに不登校に陥った両親へのアプローチー親機能のバランスの解体と再生についてー」(査読付き)	単	2004/7/ 1	心理臨床学研究 第22号 1巻	23~33	兄弟が共に不登校に陥った事例で、両親面接によって問題が解決した終結例の治療過程を報告し、両親サブシステムの機能不全の回復過程について検討した。その結果、親機能には、子どもの自主性を尊重する「任せる機能」と、子どもを適切な方向に導く「ガイドする機能」があり、その両機能のバランスが破綻した

様式第 4 号 (教員個人に関する書類)

	<p>3. 「思春期症例を通してみた変動する家族についての一考察」(査読付き)</p>	<p>単</p>	<p>1996/12/1</p>	<p>家族療法研究 第 13 号 3 巻</p>	<p>34~39</p>	<p>とき、子どもに問題が生じることを論じた。また、兄弟間の補償作用が親機能を保護していることが示唆された。</p> <p>価値観の多様化や自己愛傾向など、現代社会が抱える問題が家族に与える影響について、ある思春期の不登校の事例を通して考察した。有名中学への登校を拒否した長男は、今日の自然破壊を憂い、両親は古いや靈感など神秘主義的な世界に没頭していた。現代における家族は、技術の世界と超越の世界とうアンビバレンツを抱える容器とならなければならないことを論じた。</p>
	<p>4. 「親面接」再考</p>	<p>単</p>	<p>2019/3/20</p>	<p>甲子園大学紀要 第 46 号</p>		<p>親面接は教育領域や医療領域、福祉領域など広い範囲で盛んに実施されているが、その基本的進め方や技術、視点などは統一されたものが少ない。</p> <p>そこで日本における親面接発展の歴史を概観し、家族療法との関係について検討しながら、標準的親面接において家族療法の視点や技法が十分援用可能であり、より多様化する家族問題に対してはそうした多角的アプローチに基づいた親面接がより効果的であることを考察した。</p>
	<p>(学会発表) 1. 強迫症の家族研究</p>	<p>単</p>	<p>1991/9/1</p>	<p>日本心理臨床学会 10 回大会 (京都)</p>		<p>強迫症の患者の家族の性格特徴、家族関係、多世代伝達の特徴、遺伝要因、体質などに 15 家族を調査した。家族には患者と同様に強迫傾向が見られ、一族の栄枯盛衰の大きな変動が見られた。そうした多世代に渡る不安定性が患者の精神状態に影響を及ぼしている可能性が考えられ、特に家系の栄枯盛衰は、長男的なポジションにある患者にとっては自己の家族からの分離欲求と家系への忠誠心の葛藤を引き起こしていることが考察された。</p>
	<p>2. 境界性人格障害の両親への家族療法ーヒエラルキーの逆転についてー</p>	<p>単</p>	<p>1998/6/1</p>	<p>日本家族研究家族療法学会 第 15 回大会 (熊本)</p>		<p>境界性人格障害の患者の両親へのアプローチについて、複数の治療例を例示して、治療の留意点について、家族構造のヒエラルキーの逆転を早期に治療する必要について述べた。患者が、自身の精神症状の原因を両親に転嫁し、激しく両</p>

様式第4号 (教員個人に関する書類)

						親を攻め立てていた症例では、両親は罪悪観を抱き、子どもに対して必要な介入が不可能になっており、そのことが問題を悪化させていることが考察された。
「健康・スポーツ心理学概論」	(著書) 1.「メンタルヘルスへのアプローチ—臨床心理学、社会心理学、精神医学を融合して」	共	2009/7/1	ナカニシヤ出版	41～59	メンタルヘルスに関するさまざまな諸問題について、臨床心理学の立場と社会心理学、精神医学の立場から、それぞれの専門家が各テーマを論じた。最終章では学際的に各専門家の間で討論を行なった内容を掲載した。(執筆部分：安村は第3章 第2節「家庭ライフサイクルにおけるメンタルヘルス」を担当し、家族の各ライフステージに特有のストレスとそれへの対処法を論じ、現代における家族の問題を考察した。(著者：西村健、藤本修、高橋依子、白樫三四郎、竹内亜古、安村直己 他。)
	(学術論文) 1.「精神療法における自己愛と甘えの問題について」	単	2011/12/1	甲子園大学紀要第38号		ナルシズムの概念は、フロイト以来、その理論的複雑さから多くの問題が指摘されてきた。近年、自己愛人格障害の診断名が登場したこともあり、病的な自己愛と健康な自己愛に混乱が生じていると考えられる。本論文では、そうした自己愛をめぐる歴史的語論を概観し、さらにそこに土居の甘え理論から自己愛の問題を臨床的に検討する。最後に自経例を提示し、「自分がある」状態と健康な自己愛の関連性を考察した。
	2.「悲劇人間」の精神分析—ハインツ・コフートと自己心理学—	単	2012/12/1	甲子園大学紀要第39号		新しい精神分析的自己心理学を打ち立てたハインツ・コフートは、自らの人間観を「悲劇人間」とし、フロイトの「罪責人間」とは異なった視点から分析治療を行なった。コフートの視点は、現代人の自己愛の問題を捉えており、今日の臨床場面において「悲劇人間」の視点は臨床的に有効であると考えられる。本論文では、コフートの症例と筆者自身の症例を検討し、現代における自己愛の問題とコフートの自己心理学の汎用性について考察した。
3.「フロイト的治療態度」再考	単	2015/12/1	甲子園大学紀要第42号		フロイト的態度といわれる治療者の中立性匿名性、受身性をめぐる「禁欲原則」を現代精神分析の観点から再検討した。特に現代自己心理学派では、患者の欲動	

様式第4号 (教員個人に関する書類)

	<p>4.「発達臨床心理センターにおける子育て支援事業の経験をふり返って」</p> <p>(学会発表)</p> <p>1.恋愛関係に陥ると混乱した青年期患者の治療過程</p>	<p>単</p> <p>単</p>	<p>2018/3/20</p> <p>2003/5/1</p>	<p>甲子園大学紀要第45号</p> <p>日本心理臨床学会22回大会 京都国際会館</p>	<p>を禁欲させる視点ではなく、患者が必要としている自己対象欲求を満たすことを治療的とする視点が優勢を占めており、むしろ「至適応答性」いう概念によって治療者の態度が見直されていることを示した。</p> <p>甲子園大学発達臨床センターがこれまで長年実施してきた子育て支援事業である「無料発達相談会」と「きらきら子育て講座」(宝塚市と共催)の活動をふり返って、近年の若い母親たちが子育てに関する知識や助言を切実に求めており、子育て講座へのニーズが非常に高まっている現状を報告し、それへの対策はどうあるべきか、母親が求めているものはいったい何なのかについて考察した。</p> <p>異性関係で混乱する境界性パーソナリティ障害の男性患者への個人精神療法の治療経過を報告し、その共感的介入について検討した。患者は分離個体化に問題があり、彼女との一体感に執着し、彼女との離別に対して破滅不安に襲われた。患者はそうした自己が消滅する不安を面接において明確に言語化することができ、治療者が深く共感することで、逆に患者との間に治療的な自己対象的結びつきを生み出した経過を考察した。</p>
健康・医療心理学	<p>(著書)</p> <p>1.「現場に活かす精神科チーム連携の実際」</p> <p>(学術論文)</p> <p>1.「重症対人恐怖症の統合的治療」</p>	<p>共</p> <p>共</p>	<p>2006/7/1</p> <p>1996/11/1</p>	<p>創元社</p> <p>心理臨床学研究第14号</p>	<p>47～50 153～166 . 218 ～232</p> <p>.86～97</p> <p>精神科医、臨床心理士、精神科ソーシャルワーカーの三職種が、それぞれの専門性を発揮しながら連携し合うにはどうすればいいかを実践的に論じた。精神科臨床の現場に必要な知識として、三職種の特徴的な視点を事例ごとに明らかにし、連携の工夫について考察した。(執筆部分：第2章3節「集団精神療法」第4章7節「転換性障害・解離性障害」12節「統合失調症」を執筆。) 著者：藤本修、水田一郎、丸山総一郎、東牧子、安村直己 他。</p> <p>家族に問題があると家族療法を求めて来所した人格障害水準の重症対人恐怖症の患者への6年に渡る個人療法と家</p>

様式第 4 号 (教員個人に関する書類)

	(査読付き)			1 巻		<p>族療法を統合して行なった統合治療の終結例の治療経過を報告し、人格障害水準の治療には、家族システムレベル、対人関係レベル、個人精神内界レベルへの治療を重層的に行い、それらの治療の相互作用を計り、それぞれの効果を統合することが必要なことを、事例の経過をもとに臨床駅に論じた。著者：松田孝治、安村直己</p>
	2. 「境界線人格障害の精神分析的治療法—支持的技法および表現的技法—」 (査読付き)	共	1999/4/1	精神分析研究 第 4 3 号 5 巻	47～58	<p>境界線人格障害に対する精神分析的治療法の有効性や必要な支持的技法と表現的技法について論じた Dr. Horwitz の論文を紹介し、メニンガー財団で長年にわたって行なわれた精神療法研究の成果や、精神分析的治療法の支持的技法と表現的技法のさじ加減、またそれぞれ禁忌となる条件などについて論じた。著者：高橋哲郎、安村直己</p>
	3. 「臨床場面における治療的相互交流の共同構築について」	単	2007/12/1	甲子園大学紀要 第 34 号		<p>現代の精神分析は、治療者の客観的科学性に基づいた正確な解釈による治療という自然科学モデルから、治療者と患者の関係性による治療体験の創造という関係性モデルへと変化している。そして、治療的な転機は、治療者と患者の相互交流によって共同構築されると考えられるようになってきている。そこで自経例の中から、そうした相互交流のいくつかを具体的に検討し、その治療的相互交流の構造について考察した。</p>
	4. 「間主観的アプローチから見た治療的やり取りの検討」	単	2008/12/1	甲子園大学紀要 第 35 号		<p>コフートの自己心理学から発展した間主観性理論は、現象学的な議論や哲学的思索を含み、難解な理論的側面を有していた。しかし、そのアプローチは極めて臨床的な治療感覚を提示しているように思われる。そこで、筆者の臨床例のやり取りのいくつかを間主観的視点から詳細に検討し、間主観的なアプローチの実際的な有効性を検証した。</p>
	5. 「ロジャースとコフートの理論と臨床における接点について」	単	2009/12/1	甲子園大学紀要 第 36 号		<p>本論文ではロジャースのクライエント中心療法とコフートの自己心理学的治療を理論的、臨床的に比較検討することを試みた。その結果、両者は、クライエントの自己体験のあり方に焦点を当て、自己をより良く体験することを治療の方向性としていることで共通していた。ロジャースは共感そのものを、コフートは解釈を第一義とする点が異なってい</p>

様式第 4 号 (教員個人に関する書類)

	<p>6. 「自己愛障害をめぐる現代のユング派とコフートの接近について」</p>	<p>単</p>	<p>2010/12/1</p>	<p>甲子園大学紀要第 37 号</p>	<p>た。最後に自経例を検討し、治療が有効に進んでいく際には、共感と解釈は渾然一体となって生じていることが示唆された。</p> <p>現代のユング派は自己愛障害の分析治療に精力的に取り組んでおり、しばしばコフートを引用している。本論文では、そうした現代のユング派の自己愛障害に関する分析を概観し、コフートの自己心理学の視点と現代ユング派の視点を比較検討する。そこでは多くの一致が見られたが、セルフの概念については大きな相違点が見られた。最後に自経例の検討を通して、コフートの理論にユング派のイメージを重ねることが臨床的に有効であることが示唆された。</p>
	<p>7. 「現代自己心理学における共感の探究」</p>	<p>単</p>	<p>2013/12/1</p>	<p>甲子園大学紀要第 40 号</p>	<p>現代自己心理学において近年探究されている治療者と患者の共感的相互交流プロセスの最新の研究を概説し、さらに成人の精神分析とのつながりが指摘されている現代における乳幼児研究の成果との関連を概観することを通して、それらがいかに現代自己心理学の知見と一致しているかを考察する。また、筆者自身の臨床事例を現代自己心理学の視点から検討し、在と不在に揺れる治療者と患者の相互交流から間主観的な心が生成することを臨床的に論じた。</p>
	<p>(著書) 1. 「体験から学ぶ心理療法の本質―臨床における理論・技・芸術」</p>	<p>共</p>	<p>2002/2/1</p>	<p>創元社</p>	<p>242-259</p> <p>心理療法の本質的な側面をスーパーヴィジョンを通してスーパーヴァイザーが体験した側面やさまざまなセラピスト訓練の中で体験した側面から捉えるようとする試みである。本書は心理臨床家東山紘久氏に教えを受けた心理士たちが自身の指導者との体験を基に考察を深めたものであり、そこには心理療法家の成長過程に伴う葛藤や苦しみなど、心理療法の本質にかかわることが如実に示されている。(監修者東山紘久) 執筆担当部分。安村は「スーパーヴィジョンで学んだ面接技法と心理療法の本質」を担当した。</p>

様式第4号 (教員個人に関する書類)

健康心理カ ウンセリン グ	2.「ポスト・コ フートの精神 分析システム 理論」	共	2013/5/1 3	誠信書房	159 ~ 169. 188 ~ 194.	現代の中心的な自己心理学者、バコー ル、リヒテンバーグ、ストロロー、ラッ クマン、フォサーギ、コバーンらの新し い自己心理学理論を紹介し、現代自己心 理学のシステム論的な視点を概説する。 詳細な症例を事例を提示し、それらに執 筆者が現代自己心理学的視点からコメ ント、リコメントを行ない、臨床的に諸 理論の有用性を検証した。(著者：富樫 公一他、安村は第2章と解説を分担執筆 した)
	3.「共感と自己 愛の心理臨床 ーコフートか ら現代自己心 理学まで」	単	2016/9/1 5	創元社	37~47	これまでの自身の論文や学会発表の内 容をまとめ直し、体系的に加筆修正し たものである。共感的理解は心理臨床家 にとって最大の治療手段であるが、その 共感の機能やメカニズムについてこれま で日本では十分に研究されてこなかつ た。しかしコフートから始まる自己心理 学派では、自己愛の研究を中心に「共感」 の治療要因の解明が進んでいる。それら の研究成果を概説し、実際の事例を提示 しながら「共感」と「健康な自己愛」の 視点をさらに臨床実践として深めるこ とを試みた。
	(学術論文) 1.「プレイル ームへの入室を 拒否した夜尿 児の遊戯療法 ー現実と非現 実の狭間でー」	単	1986/10/ 1	大阪教育 大学障害 児教育紀 要 第9号	77~ 90	遊戯療法はプレイルームという非現実 の空間を設定して行なうことに治療的 な意味があるが、この設定に対して不安 を抱く子どもがいる。しかし、そうした 混乱も治療が進むにつれて消失してい くことが多い。それは、子どもが現実と 非現実の葛藤を乗り越えていく過程と 並行している。本論文では、そうした混 乱を呈した夜尿児の遊戯療法過程を検 討し、現実と非現実の意味について論じ た。
2.「器質性障害 児の遊戯療法」	単	1987/10/ 1	大阪教育 大学障害 児教育紀 要 第10号	205-25 3	先天的な器質性の障害を負った子ども は、成長過程においてさまざまな心理的 問題のために精神的自立の機会を逸し て、二次的に精神発達が障害される怖れ がある。器質性障害児の治療には、医学 的な治療に加えて、子どもの精神的自 立を援助するための心理療法が必要とな る。本論文では、母子分離に遅れが指摘 された器質性障害児の遊戯療法の治療 経過を検討し、傷ついた子どもの精神的 成長の道程について考察した。	

様式第 4 号 (教員個人に関する書類)

	<p>(翻訳書) 1.「臨床的共感 の実際－精神 分析と自己心 理学へのガイ ド」 (M.Berger)</p>	<p>共 訳</p>	<p>1999/6/1</p>	<p>人文書院</p>	<p>1~187</p>	<p>精神分析家の Berger が精神的な治療における「共感」の治療的な機能について古典的な精神分析理論と自己心理学理論の両視点から広範囲に検討した著書を共訳にて出版した。特に本書は理論考察ばかりでなく、臨床的な記述に溢れ、豊富な臨床例と共に「共感」の重要性を提起している。スーパーヴィジョンにおける共感についても取り上げられている。(訳者：角田豊他、安村は 13, 14, 15 章を担当した。)</p>
	<p>2.「自己心理学 入門－コフ ト理論の實踐」 (A.Wolf)</p>	<p>共 訳</p>	<p>2001/10/ 1</p>	<p>金剛出版</p>	<p>249-28 4</p>	<p>精神分析的自己心理学派の重鎮、Wolf が自己心理学の基本概念と臨床を概説した入門的な概説書を角田豊氏と二人で訳出した。Wolf は自己対象や自己対象関係、自己対象転移などの自己心理学特有の概念を分かりやすく概説し、自己対象欲求の発達ラインや現実の捉え方など独自の視点なども提示しており、自己心理学理論の発展に寄与している。(原書全 187 ページを安村が全訳し、角田氏と共に推敲を行った。)</p>
	<p>3.「自己心理学 の臨床と技法 －臨床場面 におけるやり 取り」</p>	<p>共 訳</p>	<p>2006/7/1</p>	<p>金剛出版</p>		<p>現代自己心理学派の Dr.Lichtenberg が自己心理学的な理論に基づいた臨床の実際を自身の症例の記録を提示して解説した書を共訳で出版した。現代自己心理学に基づく治療の 10 の原則が従来の伝統的精神分析の原則とどう異なっているかを明確化している。動機づけシステム理論の視点から治療者の介入がどういった目的でなされているかを具体的に示している。(監訳者：角田豊：安村は第 10 章を分担訳出した。)</p>

様式第4号（教員個人に関する書類）

心理・表現療法1	(学術論文) 1.「精神療法の指針としての共感体験について」	単	2005/12/1	甲子園大学紀要第33号	ハインツ・コフトは精神分析的治療における共感の機能について論じ、情報収集としての共感の機能を指摘した。本論文では治療者自身の共感的な主観的体験が、その後の治療の治療プロセスや方向性法を示唆するガイドラインとなって治療的に作用することを論じた。さらに自経例を通して治療者の共感体験、の様相についてさらに具体的に検討し、さまざまな共感の機能について考察した。
	(学会発表) 1.「抑うつ状態の中年女性への支持・表現的精神療法—治療プロセスの自己心理学的考察—」	単	1999/9/1	日本心理臨床学会19回大会（京都文教大学）	抑うつ状態の中年女性への個人心理療法の治療プロセスを検討した。治療では患者の自尊心を支え、人生後半への課題に向けて健康な自己愛を育む自己心理学的な視点を提示した。中年期は、これまでの人生において達成したことにより自己価値観を見出せなければアイデンティティーの拡散に至る危険のある時期であり、中年期の患者の健康な自己を支える介入が必要になることを考察した。
心理演習	(学会発表) 1. 「てんかん発作をもつ不登校児Tの治療過程」	単	1986/8/1	日本心理臨床学会5回大会（大阪）	先天性の器質的障害をもつ不登校男児のプレイセラピー過程を報告し、プレイ空間の中で象徴的に自己の傷つきが再現、修復され、精神的成長が見られたことを考察し、プレイセラピー空間の治療作用について討論した。特にプレイの中で象徴的な「死と再生」の表現が多数見られたことを取り上げ、自己の修復と再生が行なわれた点を考察した。
	2.「大人になりたくない留年高校生のカウンセリング」	単	1988/7/1	日本心理臨床学会7回大会（東京）	留年を繰り返す高校生のカウンセリングを通して、内閉する青年の内的世界について考察した。内在する理想と現実との葛藤、自己愛の傷つきやすさ、モデルの不在がその背景に色濃く見られたことを報告した。特に閉じこもりの青年の自己愛の傷つきは誇大感と虚無感の葛藤の中に見られ、その扱いについては、慎重な配慮が必要であることを論じ、考察した。
	3.「プレイセラピーにおける制限について」	単	1989/9/1	日本心理臨床学会8回大会（東京）	プレイセラピーにおける制限の必要性とその治療的意味について、複数の事例を例示しながら検討した。治療者との制限をめぐる対決が治療に必要な実存的対決につながることを考察された。特
			2002/5/1		

様式第4号 (教員個人に関する書類)

	4. 「家族療法と個人療法の統合について」	単		日本家族研究家族療法学会第19回大会 (東京)	<p>に、セラピストの許容範囲が限界に達した際に、実存的な対決が生じやすく、クライアントはそこを無意識的に期待してそうした制限破りの行動を起こしていることが考察された。</p> <p>自主シンポジウムを企画し、家族療法と個人療法の統合をテーマにシンポジウムを行なった。筆者は、その際の治療者間のチームミーティングで個人療法の担当者と家族療法担当者、および主治医が情報を適切に交換し、チーム治療の影響がどのように現れているかをきめ細かく検討することの必要と、チームにおける互いの立場や専門性の尊重を留意することなど、注意すべき点について考察した。</p>
生命倫理	(学術論文) 1. 「悲劇人間」の精神分析ーハインツ・コフートと自己心理学ー	単	2012/12/1	甲子園大学紀要第39号	<p>新しい精神分析的自己心理学を打ち立てたハインツ・コフートは、自らの人間観を「悲劇人間」とし、フロイトの「罪責人間」とは異なった視点から分析治療を行なった。コフートの視点は、現代人の自己愛の問題を捉えており、今日の臨床場面において「悲劇人間」の視点は臨床的に有効であると考えられる。本論文では、コフートの症例と筆者自身の症例を検討し、現代における自己愛の問題とコフートの自己心理学の汎用性について考察した。</p>